

子どものいる暮らし——男・夫・父

## 暮らしの中で

# 子どもを観る私と私を観る子ども

安見 克夫

ある時代に育った自分

二十一世紀を新しい時代と言うならば二十世紀は古き時代と言うのかもしれない。

私の今を創りだした時代は、二十世紀の古き時代の中の新しい時代であったように思う。

その古き時代の中の新しい時代とは、戦前の古き時代から戦後の力強い復興に向けた、社会、教育、文化を核とした暮らしのことであり自分に強い影響

を与えた時代でもある。

戦後の新しい時代の中で、私自身が「新しい時代の幕開け」と感じたことは、昭和三十九年の東京オリンピックの開催に伴い、高速道路や新幹線が整備され、それと同時に日本に始めて上陸したコーラやハンバーガー、そしてグレイプフルーツなどの初めての出会いである。それは、日本にとって急速な社会変化を告げる時代の幕開けの象徴であった。その中で多くの大人たちは、次々と新しい時代を切り

拓き、その職業を目指して群がっていった。こうした激動の中で生きる私の父の姿は、何事にも厳格で、責任や義務といったことを一徹に貫く人で、とにかく「厳しく怖い人」といった印象が強かった。

しかし、こうした反面とても家族思いで、当時の唯一の娯楽であった映画を「ニュース映画館」でよく見たものである。そして帰りには決まってラーメンか屋台のおでんを食べたことが子ども心に記憶にある。また夏になると家族で祖母をつれて毎年海に連れていってもらったことなどはとても鮮明に覚えている。こうした父の優しさや厳しさを感じ感化されながら自分という価値を見出してきたように思える。つまり自分の男としての存在は、父を中心とした家族と過ごした幼年期の生活そのものの中で育ち得たことが大きいと思う。

### わが子の中に生きる自分

私は、結婚して長女が生まれると共に無意識では

あるが何か心の中に私なりの変化が表れてきているような気がした。それは、子どもに見られていく自分の姿と自分自身が家族を支えていく責任の重さを次第に感じはじめたことであるような気がする。そして、さらに子どもを中心とした生活圏が広がり家族社会と接する機会も次第に多くなり、よその同じぐらいの子を持つ親の姿が気になってしかたがなかった。

こうした中で妻は、夜、夜中に起きミルクを与え、離乳食を作り、風呂に入れ不眠不休の毎日が続く。妻の我が子への献身的な育てを見てみると私の面倒を見る上に我が子を育てる姿に頭の下がる思いがする。そして、その時々で自分のできることを探し手助けし、ある時は互いに役割りながら必死に生活してきた。

そして子どもを中心とする生活の中で、今まで経験したことのない出会いが沢山あり、殆ど興味を持たなかった遊園地やレジャー施設での遊び、そして

広々とした公園でのゲームなど、家族で過ごす機会も次第と多くなった。時に私も童心になって楽しむことが多くなり新たな生活スタイルを築いていくこととなった。

こうした新たな生活の中で子どもはそれなりに私を価値づけていくのだと思う。

ある日、私がことあるごとに口癖である「忙しくて大変だ、大変だ」と妻にこぼした時、八歳の長女は、それを聞いて私にこう言ったのである。

「お父さんって、大変だ大変だと言いながらも結局は、自分が好きでやっていることでしょう」ときっぱりと言われた私はあまりの驚きに声も出なかったのである。

いつまでも、子ども（幼児）だと思っていた我が子の成長を実感すると共に人のことをよく見ているものだと感心させられた。

また、ある日、長女が学校からニコニコしながら帰宅した時のこと、妻は私に長女が「自分でお父さ

んに報告したい」と言っていたので聞いて上げてほしいというのである。

何があったのかと思うと、長女は誇らしげに学校のテストの結果を私に直接教えてくれた。自分が頑張ったことを自分の口で私に言いたかったのである。私はそのことの意味を大切にしたいと思った。

それは、長女にとって父の存在感がかなり大きな物として受け止められているからである。子どもたちは共に喜び合ったり、叱られたり、勇気づけられたり、時にしっかり守られたりしながら、父としての私という存在を価値づけていくのだと感じた。

### 私という中で生きる子ども

子どもは、いつまでも子どもであるに違いはないのだが、私は常日頃から自分に言い聞かせて来たことがある。人は、この世に生を授かった時から、人ということであり、そこにはその人の生き方と人格があることを認めてあげなくてはならないというこ

とである。

ある出来事が私を変えた。長女がまだ乳母車に乗っていたころに子どもが眠くなり人混みの中で泣きわめくことがよくあった時のことである。

私は父親として強い口調で必死に泣きやませようとした。父であることを強く押しつけ、自分に従わせることを暗に求めて泣きわめく我が子を一生懸命泣き止ませることがばかり考え、我が子の心の内を受け止められなかった自分を今齒がゆく思うのである。あのころのことを思うといつも心が痛み、子どもを一人の人としてしっかりと認めて行かなくてはと思うのである。

ところで我が家は十二歳と十歳の姉妹と牝の小型犬一匹と暮らしている。

私を除けば全て女である。この姉妹の暮らしを見ていると自分の子どもでありながら実に滑稽に見える時がある。

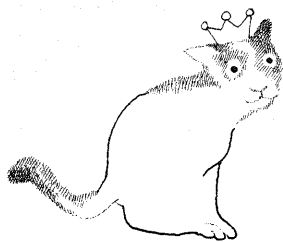
それは、長女は何もかも母親に、そして次女は、

私によく似ていることである。

その関係は、私と妻との関係のように、次女が長女にあれやこれやと口やかましく話すのである。それは夫婦の小型版のようである。だが私の役割をしている次女の口調は、妻の口調にそっくりなところがおもしろい。つまり、知らぬ間に我が夫婦の心が子どもにリストアされていくのである。

数年前、我が家で犬を飼いたいということで騒動が起きた。

家族会議が連日続き、相も変わらず次女が私の代わりを努めるように仕切るのである。そして最後の決断の日子ども達と妻は、お父さんが決めることにしようと言うのである。つまり、子ども達から見れば、最終の決定権は、父がもつものであると感じてい



るようである。そして、我が家に牝のかわいい子犬  
がやってきた。子犬の名前を付けることになった  
時、妻と子ども達は、自分達で決めると言いだし  
「シエル」と言う名前をつけた。つまり、犬を飼う  
という大きな出来事は父として、また、名前を付け  
るといったことは、父の存在感より、自分達という  
存在を感じているようである。しかし、大きな荷物  
や大工仕事やスポーツなどに対しては、父と言うよ  
り一人の男の人として存在感を感じている事が多いよ  
うである。

つまり、事の大きさや重大さなどによって、子ど  
もはすでに、父として、男として、夫としての存在  
感を無意識ではあるがその時々で感じ分けているよ  
うに思う。

### 家族の中での私

子ども達が寝静まる頃、夕食の後かたづけが終わ  
る妻と私はダイニングで一時の時間をコーヒープレ

イクをすることがよくある。

子どものことや旅行のこと、先々の人生のこと、  
そして進学のことなど話し合わなければならぬこ  
とがたくさんあるからである。すると次女がそつと  
やってきて、今日もラブラブーと入ってくる。妻が  
「そうよ、いいでしょー」と言うのと照れ笑いなが  
ら、「私にも飲み物頂戴」と割り込んでくるのである。  
そして時に、妻と私が見解の相違から口論するこ  
ともある。そんなとき、お父さんの意見が正しいと  
かお母さんの意見が正しいとかと二人の子どもが仲  
裁し裁定してくれることがよくある。

口論の話題が子どもを巻き込む話の時は、両親と  
しての関係の中に子どもとして割り込んでくるが仕  
事や将来のことなど夫婦の関係の口論となると話の  
中には決して入ろうとしないことが多いようであ  
る。

私は、子どもなりにそのへんを無意識に使いわけ  
ているのではないかと思うが、そして私自身も、その

時々の立場で無意識に使い分けているのだと思う。

そうになると、自分自身の存在感は、子どもにとつてかなり大きなものであり強い影響を及ぼしている事になる。であるならば、私は、私という成り立ちに気付いて行かなくてはならないのかもしれない。

### 我が子が感じる心

小さい時から子どもが着る服はなるべく子どもに選ばせていた。それは成長と共にそれぞれの個性が表れて来るからである。長女は、ワイルドな服装を好み、次女は、さわやかなブルー系の明るい服装を好むが、最近では外出する時、自分でコーディネートしその時の気分や行き先に合わせた服装を私に見せてくれる。

私が出ると見つめると、「何、そんなにじろじろ見るのよ」と恥ずかしげな顔を見せる。一瞬そんな時、父親であり、かつ異性から見られている複雑な気持を感じるのかもしれない。ともあれ、私自身も

子どもからの一言一言によって大きく成長させられていることに気づくのである。

いま、家族の中での父親の役割が問いただされているが、私自身、親父の姿から学び得た、楽しかったことを父親として、子どもにたくさんしてあげたいと思っている。

そして、今まで、経験してきた嫌なことは、子どもに押しつけないよう心掛けているつもりであるが、周囲から言わせると、最近親父にそっくりだそうである。父親としての存在感が強ければ強いほど、子どもを縛ることになるから、その時々で、その立場にたつて受け止めてあげられる存在でいることの方が大切な気がしている。

とにかく今は、健康で明るく互いの繋がりを大切にできる平凡な家族でありたいと考えている我が家である。

(板橋富士見幼稚園)

☆このシリーズは、今回で終わります。